

2026年度
市川中学校 第1回 入学試験問題

国語

50分 100点満点

2026 年 1 月 20 日^{じっし}実施

【注意事項^{じこう}】

1. 監督者^{かんとく}の指示に従い、問題冊子より解答用紙を取り出し、冊子を閉じた後、試験開始のチャイムが鳴るまで、冊子の中を開いて見ないこと。
2. 取り出した解答用紙に受験番号シールを^は貼り、裏返しの状態にした後、解答用紙の上に問題冊子を置くこと。
3. 試験開始後、解答用紙に受験番号、氏名を記入すること。
4. 試験終了^{しゅうりょう}のチャイムが鳴ったらすぐに筆記用具を置き、解答用紙を裏返しの状態にすること。
5. 試験終了^{しゅうりょう}のチャイムが鳴っている間に記入した解答は、無効にすることがある。
6. 解答用紙は必ず提出し、問題冊子は各自で持ち帰ること。
7. 答えはすべて「解答らん」に書き入れること。
8. 解答の際には、句読点や記号は1字と数えること。
9. コンパス・定規は使用しないこと。

一 次の文章は、竹端寛^{たけはたひろし}『能力主義をケアでほぐす』の一部である。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して、本文には省略および表記を一部変えたところがある。

僕^{ぼく}が最近一番気に入っているケアの定義は、「宅老所^{たくろうじょ}はいこんちよ」の代表の小林敏志^{こばやしとし}さんから伺^{うかが}った、「ままならぬものに巻き込まれること」である。まさに、子どもが生まれてからの数年は、「ままならぬものに巻き込まれ続ける日々」であった。他方で、論文を書くためには、主体的かつ計画的に調査を実行し、先行研究の読み込みをするプロセスが必要不可欠である。投稿論文^{とうこうろん}の締切^{しめきり}を確認し、その半年とか1年前からデータをそろえて、その内容を吟味^{ぎんみ}しながら、論文の売りになるポイント（何がどのように新しいのか、オモロイのか）を焦点化^{しやうてん}していくプロセスが必要だ。また、文章を書くには、まとまった時間的余裕^{よゆう}が必要である。子どもが生まれる前の僕は、この論文執筆^{しつぴつ}プロセスを内面化し、時間管理をきっちり行い、締切を守り、先の先まで読んで計画的に動くことで、一定の業績を出し続けられた。でも、子育てという「ままならぬものに巻き込まれる」と、それが絶望的に出来^{でき}なくなってしまうのだ。

そうやって、赤ちゃんという「ままならない」存在と日々を過ごし、出張も講演も研修もほとんど断って家族と向き合い始めてようやく、「他者とのつながりに気づき、そこに応答責任^{りんり}を見いだすケアの倫理^{りんり}」と出会うことができた。生まれたての娘^{むすめ}だけでなく、出産で体調がボロボロになっている妻もふくめて、二人への「応答責任^{りんり}」が父であり夫の僕にはある。それを果たすことによって、娘や妻とのつながり（なおし）が膨^{ふく}らんでいく。そういう膨らみに囲まれていると、自分が「当たり前」にしていた「1業績評価主義^{じけつひやうしぎ}」がぐらぐら揺らぎ始める。とはいえ、進学塾^{しんがくじゅく}に入った中学1年生のころから30年かけて内面化してきた、そのような数値による評価の絶対主義を、簡単に手放すことができない。ケアの世界はオモロイ。でも、大学人として生き残るには、業績主義^{じけつしぎ}も手放^{てはな}せないのではないか？ そういう問いや疑問が最大化していったのだ。

ただ、そうはいっても、僕の中で疑いような確信が、子育て当初からあった。それは、業績主義という「正義の倫理」

を手放さない限り、妻や娘との「関係性を破壊する」可能性が高いということだ。簡単に言えば、今までの仕事中心主義で生きていれば、妻や娘に早晚愛想を尽かされ、捨てられるだろう。それはゼツタイに嫌だ！ であれば、僕の生き方を変えるしかない。当時の僕には言語化出来ていなかったが、それが「正義の倫理」から「ケアの倫理」へと、自分が大切にする倫理観を変更することでもあったのだ。

…〈中略〉…

夫婦二人の時代は、お互いが自律的に動く「大人」だったので、夫婦間の対話を継続していれば、「維持や修復、関係それ自体への注視」はあまり必要がなかった。子どものいない夫婦関係は、**2** ある種の「契約関係」で済まされていた。でも、娘というケアを必要とする存在が間に入ると、「以前に決めたことだから」は全然通用しなくなる。予定や予測はあくまでも「目安」であり、その前提が崩れても落ち込んでいては、話をはじめまらない。風邪をひいた、熱が出た、嘔吐をした、ぐったりしている…。家族の体調変化を偽らざる事実と受け止めた段階で、夫婦で娘の様子を見ながら段取りを組み直し、先の予定も現状に合わせて変更し、その時点から「できる最善のこと」をするしかないのだ。

そうやって親である僕だけの意向や希望を優先することなく、娘や妻のその時々々の体調やニーズに合わせてながら、柔軟にダイナミックに予定を変えていく。そのことが当たり前になると、**3** 「自分の思い通りにしたい」という欲望が、ずいぶん見込みの狭い欲望だとも見えてくる。それは、自分一人で完結する欲望だからである。娘と妻のご都合をすりあわせることは、一人の欲望を押し通すよりは、遙かに面倒だし、何度も変更を迫られることもしばしばある。「またかよ！」と叫びたくなったときは何度もあった。でも、そういう「終わりなきプロセス」に付き合い続ける中で、チーム家族、というか、家族としての一体感のようなものが出来てくる。

ただ、これは父の言うことに妻と娘が黙って（耐え忍んで）従う、という家父長制的なチームとは全く違う。そうではなくて、お互いがお互いの事情をケアし合い、体調や睡眠状態を確かめ合って、無理しない範囲で、みんなが楽しめる・いきいき

と出来るスケジュールをその都度考えていく、というやり方である。そういう「よりよい関係性」を続けていくための終わりのない対話のプロセスこそ、ケアを中心とした世界のダイナミズムなのだ、とも、子どもが生まれてから気づくことが出来た。そのことに気づけたとき、自分がこれまで見ないことにしていた・子どもを通じて新たに知ることが出来たのは、「勝ち負け」のような「強さ」を強迫的に追い求めるつながりとは逆の、「弱さ」を基軸としたつながりではないか、とも思い始めた。

理性を重視する伝統的な哲学に対して、※脆弱性の定義に見たようにケアの倫理は、身体を具えた具体的な人間存在が前提である。そして、あらゆる身体は脆弱性を抱えているという点において、ひとは平等であり、かつ一人ひとりその心身は別個 (distinctive) であるだけでなく、人間関係を含めた異なる環境に左右されやすい (vulnerable) という個別性において、唯一無二の (unique) 存在であると、ケアの倫理は考える。
(※p246)

「あらゆる身体は脆弱性を抱えている」というのは、僕自身が「蓋をしてきた」現実でもある。実は僕だって、小さい頃からよくお腹を壊し、「またお腹壊したの!」と母親になじられるのが嫌で、親にバレないようにこっそり※正露丸を飲んでいた。子どもが生まれる前から、スケジュールが詰まりすぎると、季節の変わり目に必ず風邪をひいていた。30代から抜け毛が増え、後頭部が薄くなり、40代になると手足の冷え性も深刻になってきた。30代後半から不妊治療の一環として漢方医に通うようになり、それまでの自分が身体の悲鳴に鈍感だったただだと気づかされた。薄毛や冷え性などの様々な身体症状という形で現れているのは、己の脆弱性そのものであると、少しずつ気づき始めた。でも、この脆弱性や弱さを認めると、「勝ち負け」のロジックでは、「負け」てしまう。だからこそ、見ないように、「なかったこと」にしてきたのだ。

一方、まだ「社会化」されていない娘は、そのような隠蔽や偽装工作はしない。堂々と、自らの身体の脆弱性を、そのものとして表現してくれる。そんな娘に対して、「また風邪をひいたん?」と声を出してみても、「いや、僕自身だって風邪をしょっ

ちゅうひいているぞ！」と気づかされるのである。そして、誰しも身体の脆弱性を捉えている、という点で、「ひとは平等」であり、「唯一無二の (unique) 存在である」というのも、今なら心から頷ける。

「努力すれば報われる」「努力しない限り報われない」という、日本人にはお馴染みの価値観がある。この価値観は、努力の「機会の平等」を前提にしている。だが、この前提はちよつと考えると怪しい。本人や家族の経済状況、心身の状況によって、努力の機会の平等は保障されていない。親に経済的な余裕がないと塾に通えない、自分の親や祖父母の介護やサポートをしている (ヤングケアラーの) ため自分の勉強や遊びに集中できない、など努力の前提状態が他の人と違うひとは沢山いる。そもそも親が、「勉強している (親の宗教の集会に出かける、ピアノを練習している、言いつけに黙って従っている……) ときに『だけ』愛してくれる」という条件付き愛情を子どもに注いでいる場合、その子どもにとつての「努力」は苦痛でしかない場合もある。つまり、⁴ 努力する「前提」は平等ではなく、千差万別なのだ。

これが「一人ひとりその心身は別個 (distinctive) であるだけでなく、人間関係を含めた異なる環境に左右されやすい (vulnerable) という個性」であると、これも書いてみたら当たり前なのだが、不覚にも僕はこのことに、子育てをするまで気づけなかった。このような一人ひとりの質的差異を無視して、「努力すれば報われる」と思い続け、その「努力の成果」としての業績評価主義の虜^{とり}になっていたのだ。そしてその数値比較の世界に心を奪^{うば}われてしまうと、一人ひとりの努力の前提が違ふことの背景には、それぞれのひとの「人間関係を含めた異なる環境に左右されやすい (vulnerable) という個性」があることも、見えなくなっていたのだ。

だが、赤ちゃんを※スリングに抱^だきながら、僕が娘から突^つきつけられたのは、他ならぬ目の前にいる娘の「個性」に、お父ちゃんとして関わる僕という「個性」がどう向き合うか、だった。そこには業績評価主義とか、他者比較とか、そういう「客観性」は必要とされてはいなかった。いま・ここ、で娘と繋^{つな}がる父として、彼女とどのような関係性を結べるのか、に必死であった。そして、そのような「脆弱性」や「個性」に基づいたケアの倫理を、おぼろげながら体感し始めたのだった。

誰だって弱さや愚かさ、もろさや脆弱性を抱えている。その環境に左右されやすい脆弱性（vulnerability）を基盤にした上で、一人ひとりの唯一無二性（uniqueness）を大切にする社会の方が、より安心が出来る社会である。では、そんな社会をどうやって作っていけばよいのか。僕は、自分が気づいた範囲で、出来ることから、身の回りからしていくしかない、と思っている。まず、虚勢（きよせい）をはらず、自らの脆弱性を認め、その声を聞くこと。自分の弱さを、周りの人に伝えてみることに。そして、身近な他者の脆弱性をそのものとして理解しようと努めること。⁵そのような対話的関係性からはじめるしかないと思っている。

※脆弱性…もろくて弱い性質。

※p246…岡野八代『ケアの倫理——フェミニズムの政治思想』の246ページからの引用。

※正露丸…胃腸薬のひとつ。

※スリング…赤ん坊を包み込むような形状にして、抱いたり背負ったりすることができる布。

問1 ――線1「業績評価主義」とあるが、筆者はそれをどのようなものだと考えているか。その説明として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 他者より良い評価を得ようとして、わずかな時間も大切に努力を重ね、実績を求め続けようとするというもの。
- イ 自分がどんな状況に置かれたとしても、周囲の期待があるのならば、どんな努力もすることができるというもの。
- ウ 客観的に優れた結果を残さなければ、どんな事情を抱えていたとしても、努力をしていないのだと見なすというもの。
- エ どんな環境でも積極的に行動し続けられ、客観的な成果を上げられて、他人より優れた人物だと評価されるというもの。
- オ 自分では努力していると思っても、目に見える結果を出せなければ、他人から評価されないというもの。

問 2

——線 2 「ある種の『契約関係』とあるが、それはどのようなものか。その説明として最も適当なものを次の中から選
び、記号で答えなさい。

- ア 夫婦どちらも欲望を制御でき、相手の都合を考慮しながら自分の行動を臨機応変に変えていくことができる関係。
- イ 夫婦どちらも欲望を制御でき、夫婦関係を継続していくために対話を続けながら夫婦の決まりをつくっていく関係。
- ウ 夫婦どちらも自律しており、お互いの思い通りになるように自分がしたいことを主張することが許されている関係。
- エ 夫婦どちらも自律しており、夫婦間のやりとりを通して決めたことはおおよそ守られるという前提を共有している関係。
- オ 夫婦どちらも欲望を制御でき、互いのニーズを調整しながら夫婦で決めたことを確実に実行しようと協力しあえる関係。

問3

——線3『自分の思い通りにしたい』という欲望が、ずいぶん了見の狭い欲望だとも見えてくる」とあるが、それはなぜか。その理由を説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 育児を通して、融通^{ゆうづう}をきかせながら家族の予定を調整していくなかで、家族のためだと思って仕事を優先していたことがかえって家族に迷惑^{めいわく}をかけていたのだとわかり、実は自分の都合だけを優先して家族全体のことを考えていなかったのだと気づいたから。

イ 育児を通して、家族全体の状況に合わせて臨機応変に予定を変更していくなかで、家族全体のことを思いやって行動する責任があるのだと自覚するようになり、子どもが生まれる前の自分は他者の都合をあまり考えずに行動していたのだと気づいたから。

ウ 育児を通して、自分の意向を優先させずに家族のニーズをすり合わせて最善を尽くしていくなかで、みんなで協力しなければ家族全体がうまくいかないと思うようになり、自分ひとりで家族をまとめられるという今までの考えが誤っていたことに気づいたから。

エ 育児を通して、自分の思い通りにしたいという欲望をおさえて家族全体の都合をすり合わせていくなかで、かつてのようには仕事を優先していると家族に嫌われてしまうのだとわかり、父親になる前は自分の思い通りになることを中心に考えてしまっていたことに気づいたから。

オ 育児を通して、家族全体のニーズに合わせて柔軟な対応をしていくなかで、自分が家族全体のニーズを満たす責任を果たしていなかったのだと考えるようになり、自分が思い通りにしていたせいで家族の関係が悪化していたのだということに気づいたから。

**問
4**

——線**4**「努力する『前提』は平等ではなく、千差万別なのだ」とあるが、それはなぜか。40字以内で説明しなさい。

問5

——線5「そのような対話的関係性」とあるが、それはどのようなものか。筆者が「ケアの倫理」に気づく前の「正義の倫理」にもふれながら、本文全体をふまえて、100字以上120字以内で説明しなさい。

【二】次の文章は、伊吹有喜『雲を紡ぐ』の一部である。広志は妻の真紀と娘の美緒の三人で都内に住んでいた。高校生になった

美緒は、学校での人間関係がうまくいかず不登校になった。ある日、美緒は、心の支えであった赤いショールを真紀が捨てた
 と思い込んで腹を立て、広志の父が住む岩手の家へと出て行ってしまった。美緒の家出から数か月が経ち、広志と真紀は改め
 て家族三人で美緒の今後のことを話すために岩手の家を訪ねたが、口論の末に真紀は美緒をたたいてしまう。次の場面は、親
 戚が美緒を連れ出した後、残った広志が真紀と広志の父の三人で話をしている場面である。これを読んで、後の問いに答えな
 さい。なお、出題に際して、本文には表記を一部変えたところがある。

テーブルの一点を見つめたまま、真紀は動かない。

担任しているクラスのいじめの問題に取り組んできた真紀は、八月に入ると一気に痩せ、時折ふらつくようになった。心配
 した上司から休養を取るようすすめられ、急遽、昨日から早めの夏休みを取っている。

昨夜、暑さに目が覚めて水を飲みに行くと、真紀の部屋のドアが少し開いていた。何気なくのぞくと、背中を丸めてパソコ
 ンを見ていた。※ネットの書き込みを見て、岩手に迎えに来たのだろうという美緒の言葉は、たぶん七割ほど当たっている。

父がシヨウガの酢漬けに添えられた小袋を切り、小皿に醤油を出した。

黙って席に座り、父の手元を眺める。隣から真紀の声がした。

「どうして黙ってるんですか」

切々とした真紀の声に驚き、広志は横目で様子をうかがう。

真紀が顔を上げ、すがるような目で父を見た。

「何か……おっしゃってください」

醤油を入れた小皿を、父が真紀の前に置いた。

「先に言いたいことがあるだろう」

「あやまれって言うんですか？」

「誰に？」

ささやくように言った父の声が優しい。

真紀が麦茶をあおるようにして飲み、肩を落とした。

「2 私、もう疲れた……疲れました。わからない、何もかも」

父が黙って、真紀のグラスに新しい麦茶を注いでいる。

淡々と真紀が言葉を続けた。

「何を言っても黙りこむ夫。……黙ることで相手を従わせようとする。何を聞いても黙りこむ娘。言いたいことがあるなら言えばいいのに押し黙って、こちらに歩み寄りを強いる。疲れた……もう何もかも」

「真紀、お前の見方はゆが……」

何も言うなど父が目で制した。しかし、言おうとしたことを察して、真紀は力なく言った。

「ゆがんでる……そうかもね。子育てを失敗した女が、学校で何を指導するっていうんだろう」

「そういう意味じゃないよ。家庭と仕事は分けて考えないと」

話し疲れたのか、真紀が黙った。

沈黙に耐えられず、広志は窓の外を見る。

網戸から心地好い風が入ってきた。森に囲まれたこの場所は、日が落ちると木立を抜けた風が吹いてくる。

父がつぶやいた。

「3 言はで思ふぞ、言ふにまされる」

「どういう……意味ですか」

父の代わりに「和歌の※下の句だよ」と広志は答える。

「言えないでいる相手を思う気持ちには、口に出して言うより強い。そういう意味」

岩手県の県名の由来にもなったこの歌は、高校生のときに授業で知った。※陸奥国、磐手の郡から献上された鷹「いはて」をめぐる歌だ。

※赤いシヨールを手に取り、父が布地に触れる。

「美緒について言えば、相手を従わせようとして黙っているわけではない。気持ちをうまく言葉にできず……。あるいは人に言うのがつらくて、何も言えないでいる。ただ、それだけだ。せき立てずにゆっくり見守ってやれば、あの子の言葉は自然にあふれてくる」

「それがいつあふれるかわからないから困っているんだよ、お父さん」

「だからといってシヨールを返したところで、何の解決にもならないぞ。これは家出のきっかけであって、理由ではないんだ」父が部屋から出ていった。すぐに戻ってきて、食卓の料理を横に寄せ、代わりに羊毛を紡いだ糸と、花瓶敷きを三枚置いた。ピンク、白、薄緑の四角い花瓶敷きと、太さがまちまちの糸が食卓に並んでいる。

「これは美緒が初めて織った布と紡いだ糸。4触ってみなさい」

薄緑の花瓶敷きに広志は触れる。うつむいている真紀の目の前に、父はピンクの花瓶敷きを突き付けた。

おそろおそろ手を伸ばし、真紀が花瓶敷きをつかむ。

「心にもない言葉など、いくらでも言える。見た目を偽ることも、偽りを耳に流し込むことも。でも触感^{しゅかん}は偽れない。心とつながっている脈の速さや肌の熱は隠せないんだ。ものだって同じ。触ってみなさい」

左手に持った花瓶敷きに、真紀が軽く触れた。

「もつと、しつかりと」

白い花瓶敷きの布の端をさすりながら、父が真紀に声をかけた。

「怖くて泣いている子どもに、怖くないよと言っても泣き止まないだろう。抱き上げて背中をさすってやれば泣き止む。同じだ。触ればわかる、心も伝わる。こわがらずに、もつとあの子の思いにしっかりと触れてみてくれ」

食卓の上に花瓶敷きを置き、真紀が表面を撫でた。

どう思う？ と父がこちらに視線をよこした。

「えっ？ 俺に聞くの？ よくできているね、初めてにしては」

隣で真紀もうなずいている。

「一生懸命なのは……よくわかります」

真紀が持つている花瓶敷きに、父が手をのばした。

「この布は途中までは綺麗に端を揃えて織れたのに、ここから先は端がでこぼこだ。それに美緒が気付いて織った二枚目がこれ」

父が白い花瓶敷きを見せた。その端はきれいに整っている。

「慎重に気を配って、きつちりと端をそろえて織ってきた。あの子は集中力がある。初めて糸紡ぎを教えたときは夢中になって、休憩もとらずにずっと糸を紡いでいたらしい」

「昔からそうだよ。親が不安になるほどずっと、ガラスのアクセサリーを見つめていたり。それが集中している状態とは思わなかったけど」

隣で真紀がうなずいている。意見が重なったことに夫婦の絆を感じて、真紀に声をかけた。

「ガラスのどこに夢中になっていたんだろう？」

「それは美緒にしかわからんよ」

真紀の代わりに父が即座に答えた。

「ただあの子の思いの強さは、方向さえ定まれば無類の強さを発揮する。ものづくりに向いているよ」

「でもお父さん、この仕事にはセンスも必要だろ。だからお父さんだって、あれこれ集めて目を肥やしてきたわけだし。そういうセンスがうちの子にあるとは思えない」

「ある程度は学べば身につく。必要なのは、美しいものを美しいと感じられる素直な心だ」

三枚の花瓶敷きを集め、父がやさしい眼差しで見つめた。

ピンク、白、薄緑の三枚が重なる様子は、桃の節句の菱餅のようだ。

「失敗、か……」

小声で言うと、父が淡々と言葉を続けた。

「※ジル・バークレム、エロール・ル・カイン、カイ・ニールセン。私のコレクションから、美緒が自分の部屋に持っていた本の一部だ」

弾かれたように真紀が顔を上げ、父を見た。

「子どもの頃に読んだ絵本を見て、美緒は『なんて、きれい』と繰り返し言っていた。そして、そこから何かを得ようとしている。美に感応できる素直な心はなにもものにもかえがたい。蒔かれた種は今、豊かに芽吹こうとしているんだ。失敗？ どこを指して失敗というんだ。見事だ」

美緒の作品に注いだ眼差しを、父が真紀に向けた。

「見事に育てなされた」

5 真紀の唇が震えた。その震えを隠すように、ゆっくりと顔を下に向けている。

紙製のおしぼりの封を切り、広志は真紀に差し出す。

真紀が受け取り、両目に押し当てた。

「さて、今後のことだが……心配しなくても美緒は東京に帰す。物理的に、私はもうこの家を引き払うからな」

「えっ、どこへ引っ越すの？」

父が天井を見上げた。

「この家の始末を付けて、高齢者向けの施設に移る……年明けには移る予定だ」

「いや、そんなの初耳だけど」

「当たり前だ。お前には初めて言った」

愛おしそうに、父が家の柱や壁を眺めている。

身体にガタが来てな。最近は外出もおっくうだ。※裕子たちにサポートしてもらったがそろそろ限界だ。だから美緒も、ず

っとここで暮らせるわけではない。シヨールを織りあげるまでには、気持ちが決められるようにと思っている」

「それはいつごろ織りあがるんだろう？」

わからん、と父が腕を組んだ。

「せかしはしないが、先延ばしにもしない。学校の件も進級するのか、留年するのか。あるいは転校するのか、中退するのか。自分で納得して今後の道を選ぶように配慮する」

美緒がつくった花瓶敷きと糸を、父が真紀の前に置いた。

「無為に過ごしているわけではない。美緒は必死で、自分の道を探そうとしているんだ」

父が姿勢を正し、頭を下げた。

「あと少しだけ。どうか見守ってやってくれ」

※ネットの書き込みを見て、岩手に迎えに来たのだろうという美緒の言葉：口論の中で、美緒が「私のためじゃない。娘が不登校で家出してゐるって、ネットで叩^{たた}かれたから迎えにきたんでしょ。」と言ったことを指す。

※下の句：和歌は五七五七七の三十一音からなっており、その後半の七七を指す。

※陸奥国、磐手の郡：現在の岩手県南部のこと。

※赤いシヨール：美緒の家出のきっかけとなったもの。亡^なくなった広志の母が、美緒の初宮参りの時に作ったシヨールで、美緒はこれを大切にしていた。美緒が不登校になり、シヨールをかぶって引きこもっているのを心配して、真紀がシヨールを隠したのだが、美緒はそれを捨てられたと勘違^{かんちが}いし、腹を立てて家出してしまった。赤いシヨールが作られた「山崎工藝社」は広志の父が営む工房^{こうぼう}で、今は広志の父がそこに一人で住んでいる。美緒は岩手の家にいる間、工房の見習いとしてシヨールを一枚織りあげるまで東京の家に帰らないという決意をする。

※ジル・パークレム、エロール・ル・カイン、カイ・ニールセン：それぞれ絵本作家の名前。美緒が子どもの頃に、真紀がこれらの外国作家の絵本を多く買^あい与^{あた}えていたが、当時の美緒は怖^{おそ}がってあまり読もうとしなかった。

※裕子：広志のいとこで、「山崎工藝社」で働いている。

問1 — 線1 「何か……おっしゃってください」とあるが、真紀が広志の父にそのように言ったのはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 真紀は、美緒をたたいてしまったことにうしろめたさを感じていたが、自分から話をし出す気力もなく、広志にもこれ以上は頼^{たよ}ることができないので、広志の父に何とかしてほしいと思ったから。

イ 真紀は、美緒をたたいてしまったことで今後どうしたらよいかわからず不安だったが、広志は黙ったままで何か話すことも期待できないため、広志の父に助けてほしいと思ったから。

ウ 真紀は、美緒をたたいてしまったことについて悪いことをしたとわかっていたが、意地になって黙ってしまい、謝罪のきっかけを見つけれないので、広志の父に謝罪の機会を作ってほしいと思ったから。

エ 真紀は、美緒をたたいたあとに残った三人が無言でいる状況に耐^たえられなかったが、いつも黙る広志はともかく、なぜ広志の父まで何も言わないのかわからなかったので、直接理由を聞きたいと思ったから。

オ 真紀は、美緒をたたいたあとに広志と広志の父に囲まれている状況がつかかったが、弁解しても許してもらえないだろうと思ったので、せめて広志の父から優しい言葉をかけてほしいと思ったから。

問2 — 線2 「私、もう疲れた……疲れました」とあるが、このときの真紀の心情はどのようなものか。その説明として最

も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 真紀は、仕事のためにも美緒の不登校を解決しようと岩手まで美緒を迎えに来たものの、かんじん肝心の美緒とは冷静に話し合うどころか手をあげてしまったので、自分は仕事でも家庭でも何をやってもうまくいかないときらめている。

イ 真紀は、仕事でつらいことがあったとしても、美緒と広志に誠実に向き合う努力を重ねているが、二人はそれを理解しようとして、黙ることで被害者ひがいしやのようにふるまって真紀を悪者に行っている、そんな二人の身勝手みがってさに失望している。

ウ 真紀は、家庭も仕事もうまくいかない中で家族と話し合おうとしているが、美緒や広志は大事な場面では黙りこみ、何をすることも自分から歩み寄らなければならないため、すべてが空回りしているようでむなしくなっている。

エ 真紀は、仕事が行きづまっていた大変な中でも家族を優先して美緒や広志と話そうとしているのに、二人は真紀を尊重せず、自分たちに従わせようとするので、家庭でも自分の味方がいないことを痛感し悲観的になっている。

オ 真紀は、仕事も家庭も自分なりに努力してきたつもりだが、何の苦勞も知らない美緒と広志は自分に非協力的で、自分だけがつらい目にあっているが、そんな自分の苦勞を広志の父にだけはわかってほしいと思っている。

問3

——線3「言はで思ふぞ、言ふにまされる」と、——線4「触つてみなさい」とあるが、広志の父が真紀と広志に伝えなかったのは、どのようなことか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 美緒は黙っているからといって歩み寄りを強いているわけではなく、ただ思いが強すぎるだけなので、それを理解して見守っていてほしいということと、言葉で説明するよりも実際に美緒の作った作品に触れてその細部を真紀と広志の感覚で確かめることで、見ただけではわからない美緒の秘めたものづくりの才能に気付いてほしいということ。

イ 美緒は黙っているからといって相手を従わせようとしているわけではなく、人よりも様々なことに気を遣^{つか}って何も言えなくなってしまうので、美緒の言葉があふれてくるまで待つてあげてほしいということと、美緒の気持ちが込められた作品にこわがらずに触れることで、美緒の本当の思いに向き合^あってほしいということ。

ウ 美緒は黙っているからといってなにも考えていないわけではなく、気持ちを言葉にするのが難しかったりつらかったりするだけで、待つていればしっかり思いを伝えてくれる子だとわかつてあげてほしいということと、美緒の今後についても真紀と広志の考えをおしつけるのではなく、美緒の真意を理解し、考えを尊重してあげてほしいということ。

エ 美緒は黙っているからといって相手を従^{したが}わせようとしているわけではなく、口に出さないからこそ集中力が人一倍強く、失敗しても何度もやり直す忍耐力^{にんたい}もある性格だとわかつてほしいということと、それを美緒の作品に恐れ^{おそ}ずに触れることで実感し、学校に行かずものづくりの道に進む可能性も視野に入れて、美緒の今後を考えてあげてほしいということ。

オ 美緒は黙っているからといって相手に歩み寄りを強いているわけではなく、思いが強くて言葉にできないこともあるので、無理に言わせようとせずに言葉を待つてあげてほしいということと、口に出す言葉がすべてではないので、こわがらずに美緒の作品に触れて、心とつながっている触感を通じて美緒の本質を理解してあげてほしいということ。

**問
4**

——
線 5

「真紀の唇が震えた」とあるが、このときの真紀の心情はどのようなものか。

100
字以内で説明しなさい。

問5

——線「えっ？ 俺に聞くの？」とあるが、このような発言をする広志の人物像として最も適当なものを次の中から選
び、記号で答えなさい。

- ア 自ら率先^{そっせん}して家族の問題を解決しようとするわけではなく、他人の発言に不用意に答えてしまう、少し頼りない人物。
- イ 真紀や美緒に思うところがあっても、話し合いの場では他の人の意見を尊重して自分はあまり主張しない、優しい人物。
- ウ 深刻な雰囲^{ふんいき}気が苦手で、意見を求められてもすぐに場を茶化^{ちや}してしまうところがある、無責任な人物。
- エ 無意識に人を怒^{おこ}らせてしまうこともあるため、失言するのが怖くてあいまいなことしか言えない、少し臆病^{おくびょう}な人物。
- オ 自分の気持ちを言葉にするのが下手で配慮のない発言もしてしまうが、常に家族に寄りそう、情に厚い人物。

【三】 次のア、イ、オは、【一】の竹端寛『能力主義をケアでほぐす』の文章と、【二】の伊吹有喜『雲を紡ぐ』の文章を読んだ生徒たちの

発言である。二つの文章を読んだ上での発言として適当なものには○、適当でないものには×を、それぞれ書きなさい。

ア 『能力主義をケアでほぐす』の筆者は、家族のことを大切にして個別に向き合おうとしつつも、娘に対して思わず業績主義的にも接してしまっているよね。『雲を紡ぐ』の広志も同じで、美緒を広志の父と比較してものづくりのセンスがないと言っていることから、一人ひとりに質的な差異があることを理解しておらず、美緒の「個別性」が見えなくなってしまう。父と娘として向き合うというよりはどこか他人事のような感じがするね。

イ 『能力主義をケアでほぐす』で、家族は、よりよい関係性のために対話を続けていくことが大事だということがわかったね。『雲を紡ぐ』で広志たち家族も対話を試みてはいるけれど、言葉にすることですれ違ってしまうこともあってやはり言葉だけでは対話は難しいと思ったな。でも触感しよっかんは偽れない、触れることで心が伝わるという広志の父の言葉にはっとしたよ。人はいつも正直な気持ちを言葉にできるわけではないから、対話には言葉以外の要素も重要だね。

ウ 『能力主義をケアでほぐす』では、自分と他者がそれぞれ自らの弱さを認め、互いに相手を唯一無二の存在として受け入れることから対話が始まると述べているね。『雲を紡ぐ』の中で、広志の父は、自分の身体が以前のように動かなくなっていることを認めている。だからこそ、美緒のつらさをわかってあげられるのかな。広志の父は美緒の作品を通して美緒と対話できていて、それが美緒の安心感につながっているんじゃないかな。

エ 『能力主義をケアでほぐす』では、筆者は、どんな人も努力すれば報われるという考え方をしていると家族がうまくいかなくならないと気づいたようだね。『雲を紡ぐ』の中で、真紀は、自分が子育てに失敗したと思っていて、その原因を自分の努力が足りなかったせいだと思っているね。美緒の心の声にきちんと耳を傾けて、美緒の気持ちを優先していれば、美緒が家出することはなかったかもしれないなあ。

オ 『能力主義をケアでほぐす』を読んで、自分の都合だけを優先させるのではなく、家族全体のことを考えながら対話していくことが、よりよい家族の形成につながるんだと思ったよ。『雲を紡ぐ』の中で、広志と真紀との対話も成立していないみたいだし、それが真紀を苦しめていたんだね。今回の件に関して、広志は、家族全体のことを考えて積極的に解決しようとしているようには見受けられないな。

四 次の各文の——線のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 字のイドウを調べる。
- 2 カホウは寝て待て。
- 3 オーケストラのエンソウを聴^きく。
- 4 キユウフの対象とならなかつた。
- 5 命あつてのモノダネ。
- 6 エイセイ面に注意して食事を作る。
- 7 エンジュクした演技をする。

問題は、これで終わりです。

受験番号 ()

氏 名 ()

↓ここにシールを貼ってください↓

L2026-1